

文化十

南

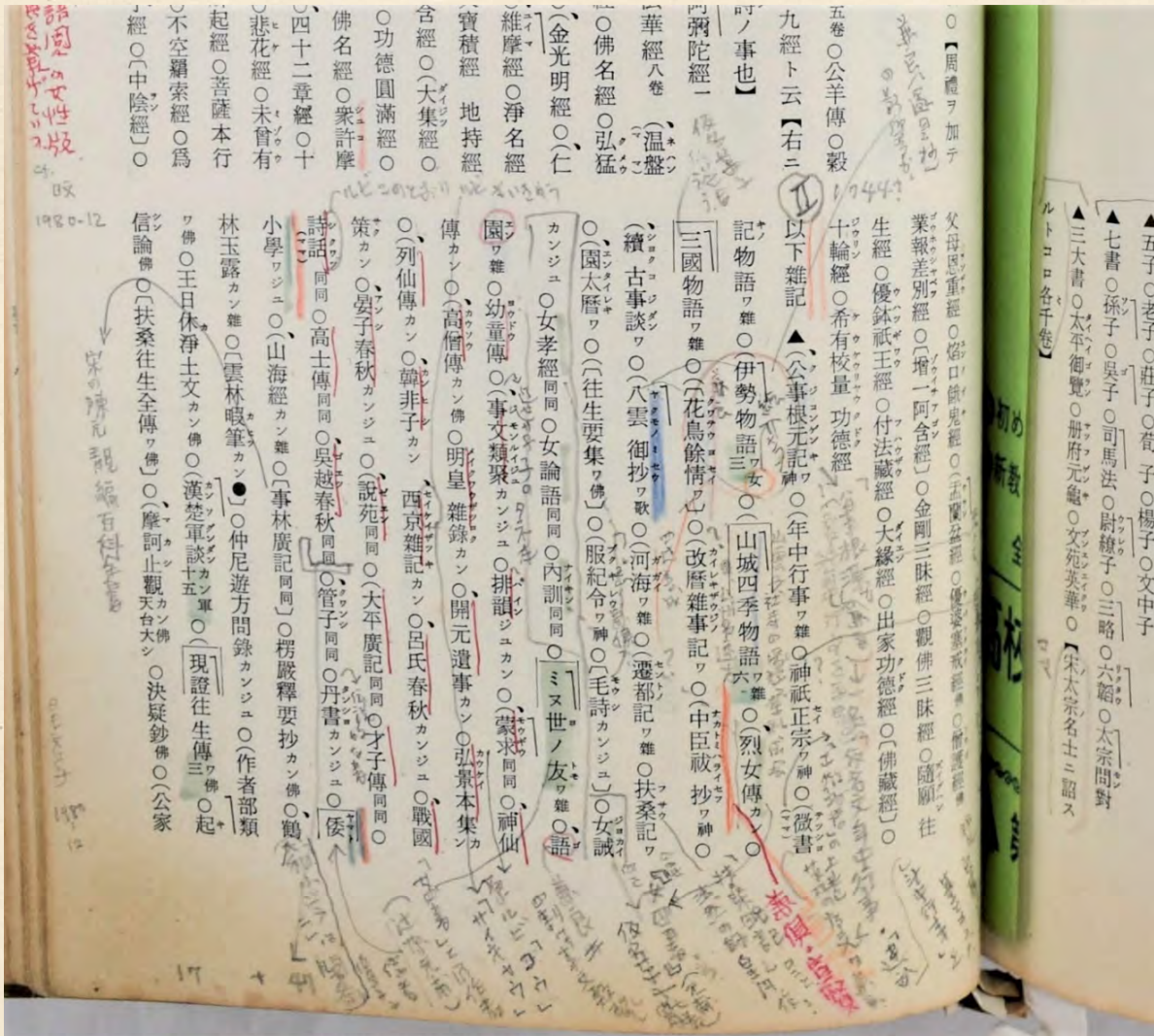


公益財団法人鈴屋遺蹟保存会  
本居宣長記念館  
Museum of Motoori Norinaga

# I 宣長のノート

## ◇ 本をノートにする

「本をマーキングしなさい。本は汚しなさい」と松岡正剛は教え、「松岡正剛の千夜千夜」などでその実践例が示れるが、今回の展示では、高校教師をしながら『宣長さん』を執筆した中根道幸の手沢本『本居宣長全集』を公開した。

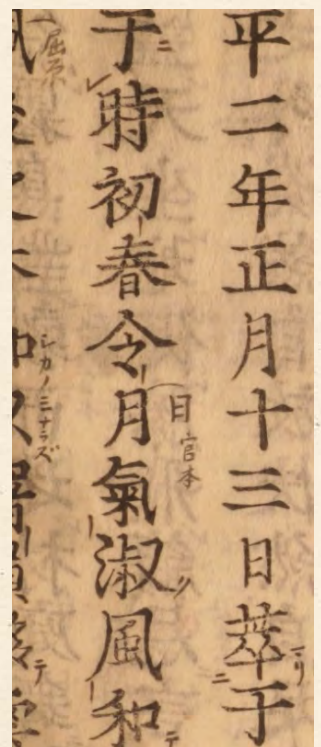


『本居宣長全集』第20巻『経籍』 中根本

中根をよく知る藤田明が、全集の編集者に「宣長全集を最初から最後まで読んだ人はいくらでもいるだろうが、中根さんは縦横斜め、後ろから前まで読んだ人だ」と紹介したことがある。なるほど、口絵の写真にまで書入れをし、使用語数を数えるなど、壮絶な書き込みである。

本というテキストは空白で出来ている。大宇宙に星が点在するようなもの、上下左右、行間、字間、余白だけである。そこで読者は相互参照の指示や関連記事、時には異論を書き込む。星座を象るように、言葉と言葉をマーカーで結んだりすることはさすがに前近代の人はしていないが、古典テキストなら異本校合もそこに入ってくる。(これがなかなか面白い。新元号「令和」の出典となった「初春の令月」も、宣長が見た「宮」本には「初春の令日」とある) そんな本を「手沢本」という。宣長の手沢本も記紀万葉などの代表的なものから、ちょっと珍しい『日本王代一覧』も展示した。

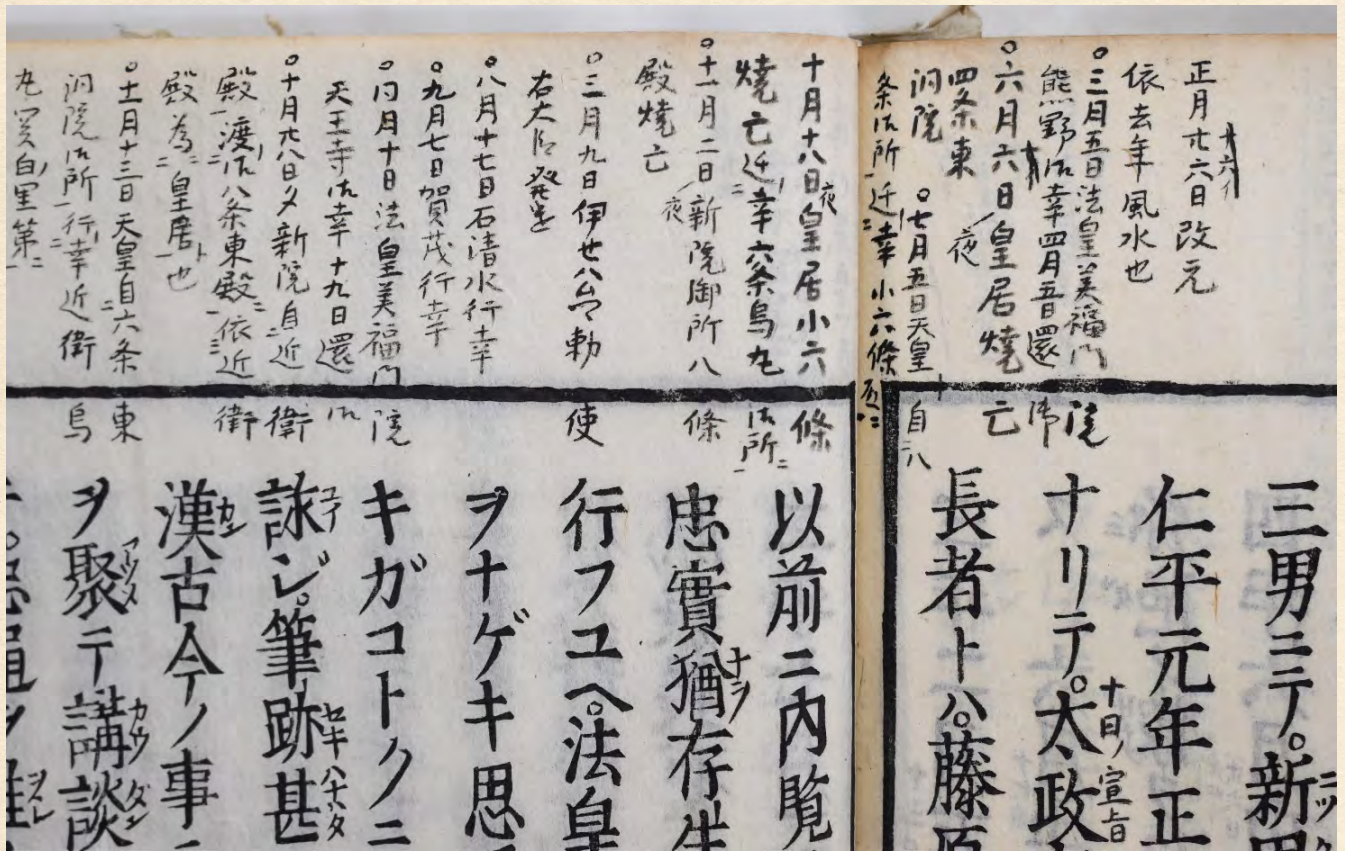
『万葉集』巻5 初春令月(部分)



## ◇『日本王代一覽』

刊行されていた日本の通史。歴代天皇毎に出来事が簡略に記載される。そこに読書などで得た知識を書き込めば、情報は時系列に並び、本はデータベースとなる。

『日本王代一覽』1151年条



## ◇ 付箋

書き入れが増えてくると、さすがの余白も文字で埋め尽くされ読みにくくなる。その時は付箋という手がある。これは書き入れの長い、『源氏物語湖月抄』紅葉賀巻のような時にも有効だ。

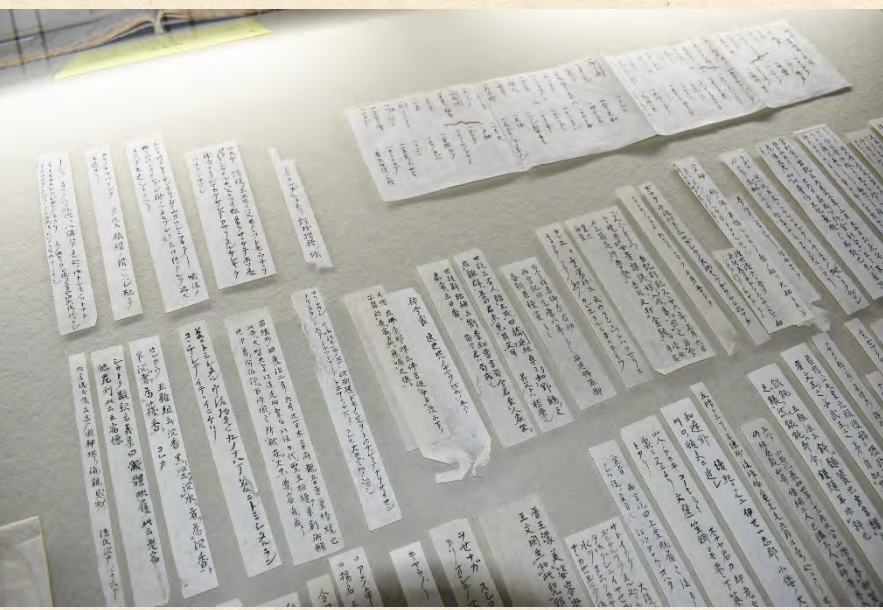
写真は、宣長手沢本『古事記』上巻。薄っぺらな紙片が本の厚さを変えてしまう。



『古事記』小口

## ◇ 浮遊する付箋たち

「外れた付箋」

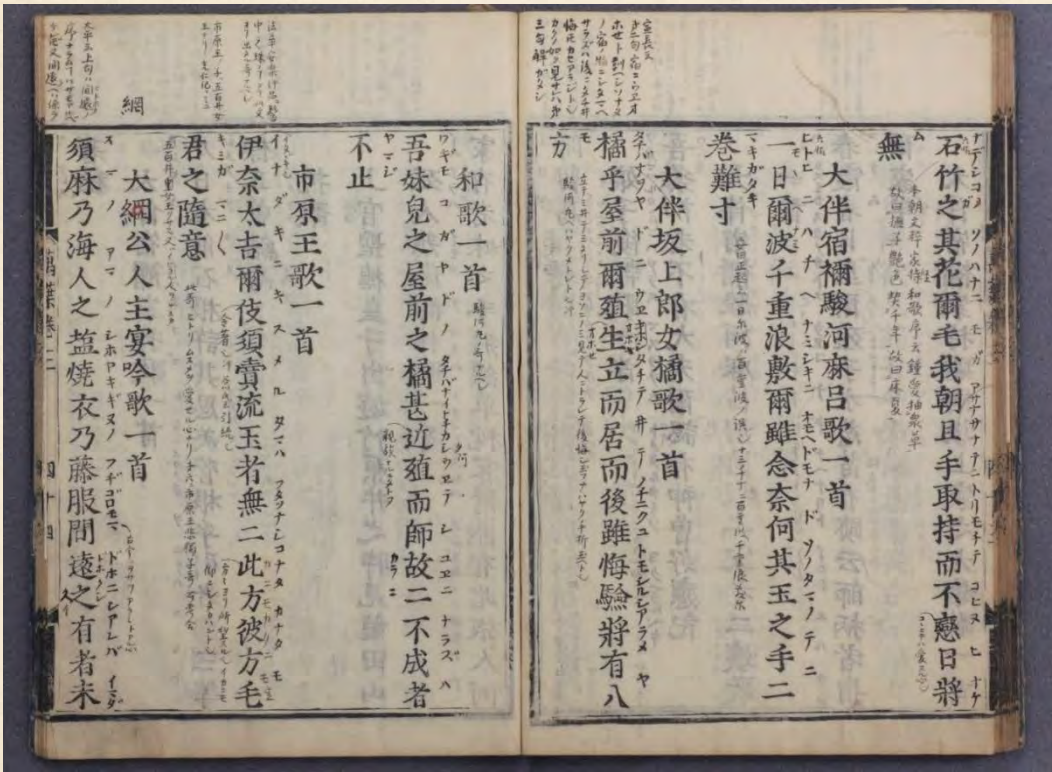


付箋には本来決まった「場所」がある。薄い糊で貼ったりもするが、挟んだだけの付箋はやがて場所からはぐれ漂流をはじめ。写真はそんな可哀な付箋たちだが、宣長は、それを元の場所に戻さず、まとめて目録まで作っている。

なるほど、本文から外れた付箋は、立派なカードだ。親にはくれた子どもたちが、時に新しい物語を紡ぎ出すように、この中から『玉勝間』の一項目となったり、新しい問題提起となったりもする。

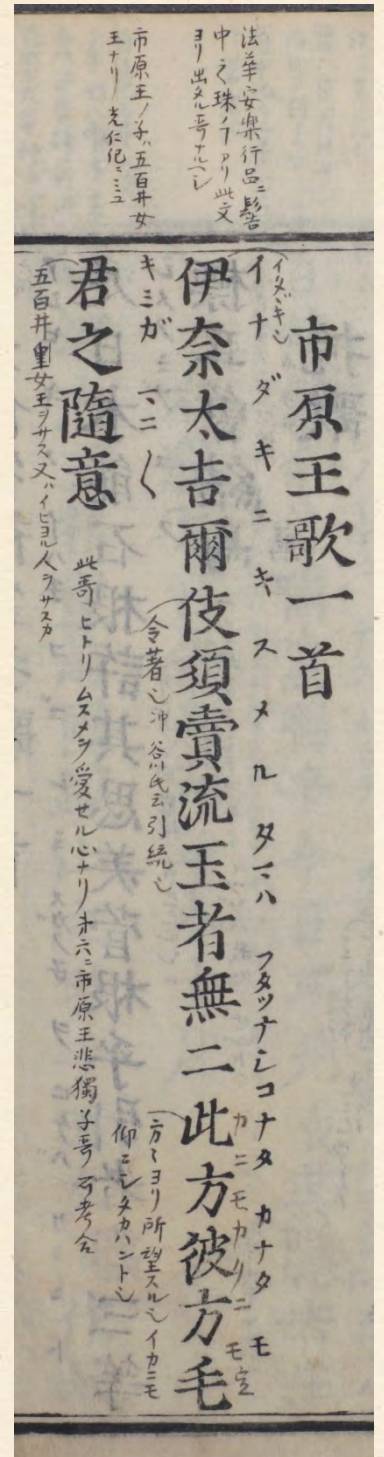
◇ 本のノート化も徹底すると新たな著作となる

相互参照の書き入れが充実すると、本は進化し、新しい本になる。例えば、宣長の『延喜式』神名帳は、神社名による『古事記』や六国史の関連記事が索引になった。凄いのは『万葉集』だ。写真をご覧ください。例えば巻3 409 番歌「一日には（一日爾波）千重波敷きに思へども」の「一日爾波」は「百重波」ではないかと言う安田正起説、412 番歌では谷川士清説、413 番歌では大平説が紹介され、もちろん真淵や契沖説、宣長の自説も書き込まれている。まさに諸説を集めた「集注本」だ。



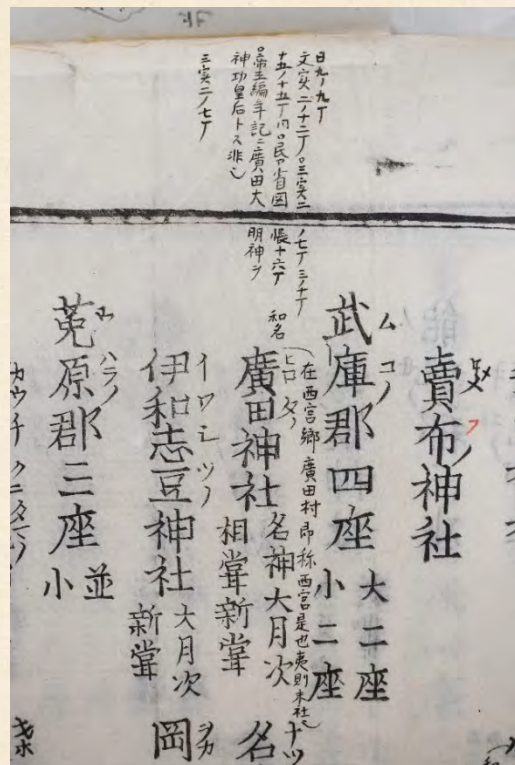
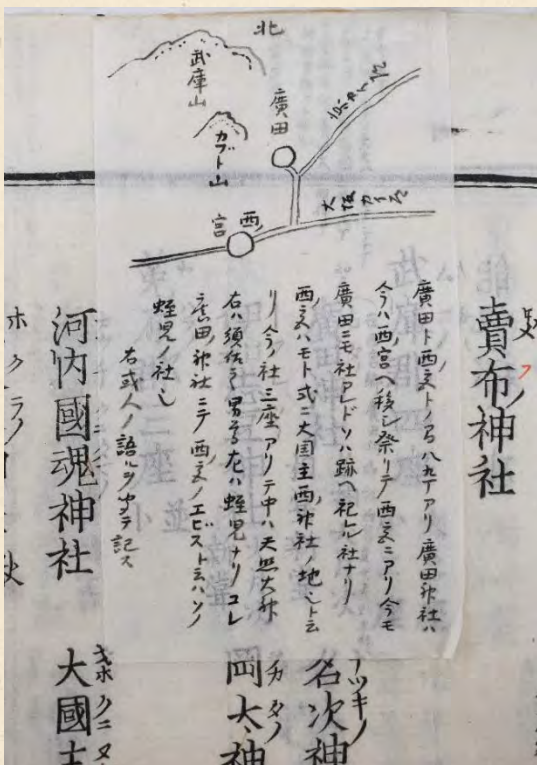
『万葉集』巻3

『万葉集』巻3・412 番歌には、契沖説や谷川士清説の他、巻6、1007 番歌「市原王悲独子歌」を援用し、一人娘を思う親の心へと分け入る。本がノートになると、その情報や感想が本文と密着することで、流れがよく分かり面白みは一層増す。



『延喜式』神名帳

『延喜式』神名帳・広田神社の項には六国史、「民部省図帳」等の関連箇所への指示や、聞書を付箋で記録する。



## ◇ 手沢本の公開

各人の説や基礎資料満載の手沢本は公開された。近在の門人はもちろんのこと、全国からの来訪者は師の講釈や歌会を待つ間、これを借覧する。自慢の説を持った人がいたら、本書を借覧して同じ説の人がいないか、別の説はないか確かめることも出来る。確かめて、やはり自分の説が宜しいと思えば、自説を書いた紙を挟んでおけば、宣長の裁定で書き加えられることもある。まさに共同研究、大情報源である。肥後山鹿の帆足長秋のように、書き入れを全部写して国に持って帰る人もいた。



『和名類聚抄』 ※「未(味)醬」の書入れは『玉勝間』巻14の項目となる

## ◇ ノートの効用

先ず、本に書き込む。それがノートに抜き出されることで問題の所在が次第に明らかになってくる。その中から著作の構想がまとまり、時には索引などの工具書（この呼び名も問題は多い）が作られ、いよいよ草稿へと進んでいく。

例えば『本居宣長随筆』のような雑多な内容で、著作には到底結びつきそうもないものもあるが、これらの消えていきそうな細い流れも、集まって、やがては『古事記伝』という大河になっていくのである。

## ◇ 随筆かノートか

ここで言う「宣長のノート」とは、次の条件に適合するものを指す。

- 1, 原則として宣長筆。2, 著作や歌集、また私的な日記類は除外する。3, 未完成であること。4, 冊子形態であること。

ノートという言葉はまだ知らない宣長は、どのように呼んでいたのか。リストを見ていただくと分かるが、随筆、覚書、聞書、摘腴、抜抄などと呼んでいる。当時、このような雑多な文章は「随筆」と呼ばれたりしていた。随筆といっても「近世随筆」で、今のエッセイとはちょっと違って範囲がむやみと広い。

例えば「日本隨筆大成」という一大叢書がある。宣長が、煙草趣味を雅文で綴った「尾花がもと」も入るが、今回の宣長のノート類は入っていない。これは偶々入らなかっただけである。つまり「隨筆」と呼ぶと、雅文や紀行まで入ってくる可能性がある。だが、宣長の最終目標が研究にあり、その一段階として捉えるときに、「尾花がもと」や、『玉勝間』に載る「ものは尽くし」のような断章などは当然除外した方が分かりやすいだろう。

### ◇ 現存する《宣長のノート》

- 1, 『経籍目録』1冊・書目☆16歳起筆〔全20〕
- 2, 『都考拔書』6冊・京都☆17～22歳頃〔全別1〕
- 3, 『事彙覚書』1冊・雜纂☆17歳〔全別1〕
- 4, 『和歌の浦』4冊・和歌☆18～24歳頃〔全14〕
- 5, 『万覚』1冊・備忘☆19歳頃〔全20〕
- 6, 『覚』1冊・備忘☆19歳頃〔全20〕
- 7, 『歌の拔書』1冊・和歌☆19歳頃〔全・書影のみ〕
- 8, 『源氏物語覚書』1冊・源氏☆20・21歳頃〔全4〕
- 9, 『和歌浦第五冊』1冊・和歌☆23～32歳頃〔全・未載〕
- 10 『本居宣長隨筆』13巻14冊・拔書☆20代半ば～60代〔全13〕
- 11, 『班史摘腴』1冊・漢籍拔書☆26歳頃〔全18〕
- 12, 『莊子摘腴他』1冊・漢籍拔書☆26歳頃〔全18〕
- 13, 『摘腴』1冊・漢籍拔書☆26歳頃〔全18〕
- 14-1, 『雜鈔一』1冊・本草・漢籍拔書☆26～28歳頃〔全18〕
- 14-2, 『雜鈔二』1冊・医書・源氏拔書☆28歳頃～〔全18〕
- 14-3-1, 『雜鈔三(1)』1冊・漢籍・和訓解☆27・28歳頃〔全18〕
- 14-3-2, 『雜鈔三(2)』1冊・雜纂☆40～45歳頃〔全18〕
- 15, 『漫識』1冊・漢籍・和書拔書☆在京中(23～28)～53歳頃〔全18〕
- 16, 『安波礼弁・紫文訳解』1冊・源氏☆29歳頃〔全4〕
- 17, 『古事記雜考』2冊・古事記☆30代〔全14〕
- 18, 『詠歌疑条』1冊・和歌・源氏☆〔全14〕
- 19, 『講後談』1冊・雜纂☆40～42歳〔全14〕
- 20, 『松の落葉』1冊・雜纂☆20代～50代〔全18〕
- 21, 『鈴屋翁拔書』1冊(他筆)・雜纂☆50歳前後〔全18〕

■ 印 ☆推定執筆時期。〔全〕『本居宣長全集』収載巻。



『本居宣長隨筆』

### ◇ ノートは「編集する」もの

先の一覧には、『新板天氣見集』や『元禄十二年の雲上明鑑』、『歌道名目』、『制の詞』など特定の書籍の抜粋は除外した。修学のテキストである『漢書』や、研究対象となる『古事記』、『源氏』などの抜書は入れた。ノートとはいえ、そこには「編集する」という意識が必要になる。

『本居宣長隨筆』の中には、中世の説話集からの引用が集注する箇所がある。たぶん同じ時期だろう、『古今著聞集』の一部を書き写した一冊もある。もちろんこれはノートとして扱わない。

## ◇ ノートを使い切らない、という知恵

「適当に」、これほど宣長にそぐわない言葉はないと言いたいところだが、ノートに関しては話は別。確かに字は細かくて粒が揃い、書き損じもないのだが、使用方法は、1冊終えて新しいのに移るというルールは存在しない。何冊ものノートを併用する。まさか書こうと思ったら見あたらないので、また新しいノートを下ろし、と言うようないい加減さではないだろう。

中には『松の落葉』や『漫識』のように30年近く使用し続けるノートもある。

ノートは一冊使い切らない。一度、真似てみたらどうだろう。存外、使い切るともういらないと仕舞い込んでしまうが、白紙があると傍に置き、自然と前の発見、感動を再確認できるという効用もあるだろう。

それはさておき、宣長ノートの「適当さ」を『本居宣長随筆』で見ることにしよう。

## ◇ 『本居宣長随筆』

書名からも見当がつくが、本書は宣長が命名したものでもなければ、一纏めとしたものでもない。特定の主題を持たない抜書、つまりノートを、後世の人が集めて「本居宣長随筆」と命名し、何を考えたのか巻数（一覧では①～⑭で表示）を付してしまっただけというのが真相。もともと執筆の順でもなければ、一部を除いて特定のテーマがあるわけでもない所へ妙な番号を付けたので混乱を招くことになった。そこで、ここでは起筆時期を推定し、おおよそ使用順に並べてみる。

- 1, ②抄録☆26～28 歳頃
- 2, ⑤「群書摘抄」抄録☆27～36, 7 歳頃
- 3, ⑪「葬庵随筆」考説☆28～44 歳頃
- 4, ③「石上漫録」考説☆32～39 歳
- 5, ①「松乃落葉」考説☆30 代後半～40 代
- 6, ⑦「石上助識篇」☆36～52 歳頃
- 7, ④「石上雑抄」考説☆40～52 歳
- 8, ⑥抄録☆42～56 歳
- 9, ⑫「飯高随筆」考説☆43～64 歳頃
- 10, ⑨抄録☆50. 51 歳
- 11, ⑧抄録☆51～63 歳頃
- 12, ⑩抄録☆55～63 歳
- 12, ⑩抄録☆55～63 歳
- 13, ⑬「聞まゝの手ならひ」聞書☆55～63 歳頃
- 14, ⑭「石上永言随筆」考説☆40 歳前後

例えば、賀茂真淵との「松坂の一夜」、また『古事記』研究に着手した34歳頃には、2, 3, 4のノートが使用中。また重要な転機となった43歳頃には、6から9まで4冊のノートが使われている。

また在京中（23～28歳）には、主題別のノート『和歌の浦』や『和歌浦第五冊』がこれに加わり、40歳前後なら『古事記雑考』とも重なっている。これは雑纂と主題別とノートの性格が違うのだから仕方ない。いずれにしても、結構ラフな使い方だ。

## ◇ ノートの区分

先の一覧で『和歌の浦』と『和歌浦第五冊』は別扱いしたのは理由がある。

「第五冊」は、記載形態だけで見ると『本居宣長随筆』二（先の表では1番）と全く同じで、まだ書き続けている『和歌の浦』第四冊とは異なる。主題は、和歌という点では共通するが、それまでの『和歌の浦』が雑纂であったのに対し、第五冊は和歌論を展開するための準備作業という意識がより鮮明になっている（とはいってもこれまたファジーなところで、『和歌の浦』第四

冊の「詩経集註序」などは、中国古代の民謡である詩経論で、『和歌浦第五冊』に入ってもおかしくないだろう)。従って形は『本居宣長随筆』と同じで、内容的には『和歌の浦』の進化形である。

ちなみに、『和歌浦第五冊』は、1997年に学会に報告された新資料である。伝来は不詳だが、宣長のもとでも『和歌の浦』や「随筆」とは別に置かれた可能性もある。また存外早く宣長のもとから流出したのかもしれない。その後の伝来は不明だが、没後200年近くたって天理大学附属天理図書館で所在が初めて確認されたのである。

### ◇ 読書をしながら何冊かのノートを使い分ける

在京中の27歳頃、宣長は『莊子』、『淮南子』、『揚子方言』、『孔子家語』、『遊仙窟』と次々読みながら、ノートに書き写していった。まず漢籍学習ノート『莊子摘映他』、次に和歌論関係の『和歌浦第五冊』、『本居宣長随筆』も取り出して書き抜く。漢籍、和歌、雑纂と一応の区分は出来るが、これも便宜的なもので、必ずしも厳密な基準はなさそうだ。

このようなノートの並行使用のおかげで、逆に執筆時期が推察できることもある。

それにしても、旺盛な好奇心とその博覧には舌を巻くばかりだ。

### ◇ ノートから著作が生まれる

和歌への興味関心が『和歌の浦』や『秀歌抄出』というノートになり、和歌論をもっと深く考えようとする中で、『和歌浦第五冊』が起筆され、やがて『排蘆小舟』となり、名歌のアンソロジーは『古今選』、また歌体変遷論へと展開する。一冊のノートの中で急成長したのが『古事記雑考』で、最初はノートが、途中から『古事記伝』草稿となる。『安波礼弁・紫文訳解』も推敲されて「もののはれを知る説」となり、『紫文要領』や『石上私淑言』へと発展していく。

雑纂のノートからも著作に発展したケースもある。『本居宣長随筆』二(先の表では1番)は、「王維詩集曰、送秘書晁監還日本国【并序】」に始まり、林道春の阿倍仲麻呂伝や「宋史日本伝」の全文引用と、まるで後年の日本古代の外交史論『馭戎概言』や『国号考』の資料集めである。宣長は豹変しない。時間を掛け、回り道をしながら、少しずつ関心を育んでいく。

### ◇ 索引

宣長にとって『源氏物語』は物語としてだけでなく、言葉の研究上でも重要な作品であった。講釈も40年という長きにわたるのだが、この長大な物語の語彙を抜き出すことをしばしば試みている。一番最初は20歳頃の『源氏物語覚書』、10年後には『安波礼弁・紫文訳解』、また『詠歌疑条』でも行っている。繰返し大事な詞を抽出する、この不断の努力が大切なのだろう。索引の集大成は『古書類聚抄』と言うジャンル別の索引(10冊)で、これは、貝原益軒に憧れ、『事彙覚書』や『都考抜書』を書いた十代後半から、亡くなる一月前に着手した『鈴屋新撰名目録』へと生涯を貫流する百科全書編纂という夢にも結びついていく。

### ◇ 読むことを拒絶するノート

宣長ノートの文字は小さいが、一文字一文字がきちんと書かれていて、目が慣れてくると読みやすくなる。ましてや索引機能も持たせたりするときは、サインペンで書いたような文字が並ぶ。ただノートの中には、他者が読むことを拒絶したものもある。展示では参考のために、今年没後500年のレオナルド・ダ・ヴィンチの『鳥の飛翔に関する手稿』[ファクシミリ版]を出したが、ご承知の通りこれは鏡文字で、読めないようにする一つの工夫である。

ところで、なぜ宣長の字は小さいのか。70歳の時の『歴朝詔詞解』草稿などは、紙背に小さな字でびっしりと書き、ダ・ヴィンチとは事情は異なるだろうが、これまた読むことを拒絶するかのようだが、宣長はこれで事足りたのである。結局はその人の性格や資質によるのだろう。ただ、このような極小でしかも長文でも大丈夫という字が書けると、最初に戻るが、本への書き入れでは抜群の力を発揮するのである。

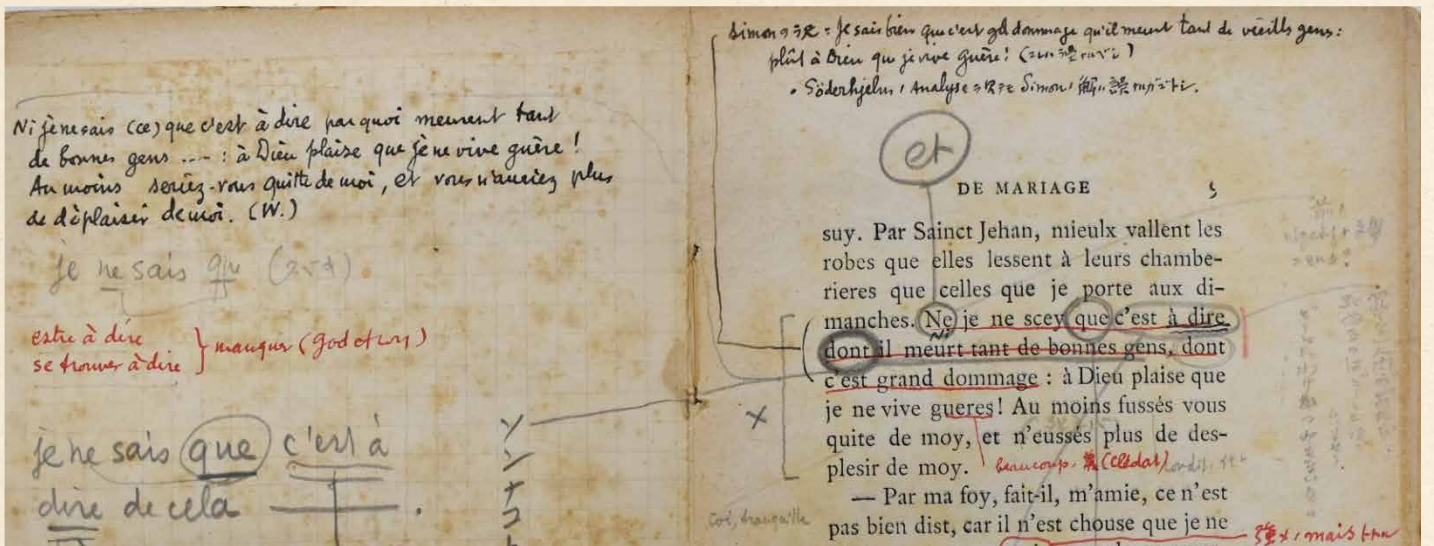








「諸氏のノート」 記念館初代館長山田勘蔵の展示品解説原稿・ダ・ヴィンチ手稿・渡辺一夫手沢本  
宣長研究者岩田隆の研究、講義用ノート・中根道幸手沢本「本居宣長全集」



仏文学者・渡辺一夫の書き入れ文字は、本文より更に小さい。(山田俊幸氏蔵)

☆宣長のノート、また行きつ戻りつする思考法については、『宣長にまねぶ 志を貫徹する生き方』吉田悦之・致知出版社刊を参照してください。



公益財団法人鈴屋遺蹟保存会  
本居宣長記念館  
Museum of Motoori Norinaga